

体験に学ぶ精神科デイケア実習の意義

三 原 亜矢巳・多喜田 恵 子

要 約

精神看護学実習では、リハビリテーション看護の理解を深めるために、病棟実習に加えて2日間の精神科デイケア実習を行なっている。本研究は、精神科デイケアでの体験学習の意義を明らかにすることを目的に、学生のレポートから精神科デイケアで学生がどのような体験をしたのか、またその体験をとおして何を感じ、考えたのかについて分析した。

その結果、①精神科デイケア実習で学生は、メンバーやスタッフの様子を見る、聞くといった観察体験と、メンバーの一員としてプログラムに主体的にかかわるという体験をしていた。②メンバーと共に行動することで、精神科デイケアの目的や必要性についての理解が深まっただけでなく、メンバーのその人らしさや自己のかかわりのもち方、メンバーとスタッフの関係のあり方などを気づくことができた。

精神科デイケア実習でメンバーの一員として体験をすることは、地域に暮らす精神障害者を一人の生活者として理解するだけでなく、対象の個性性を尊重した看護のあり方を考える上で重要な学習体験の機会となっていた。

キーワード：精神看護学実習、精神科デイケア、体験をとおしての学習

I はじめに

精神看護学実習は、従来の入院患者のケアを中心とした実習から、入院から地域生活にわたる幅広い援助を学ぶ方向に移行しつつある。これは、精神障害者を単に心を病む人としてとらえるだけではなく、個人のライフサイクルにそった生活者としてとらえることを重視したものである。そのため精神看護学実習も病院だけでなく、精神科デイケアや精神障害者小規模作業所、精神科訪問看護など、多岐にわたる地域精神保健活動の場で行なわれるようになってきた。

本学においても2週間の精神看護学実習のうち、精神科病棟実習と2日間の精神科デイケア実習を行なっている。精神科デイケア実習では、精神科リハビリテーション看護のあり方の理解を深めることを目的として、精神科デイケアのもつ様々な機能や意義、援助の方法の実際を、デイケア利用者（以下メンバー）の一員として体験してくるよう学生に伝えている。精神科デイケアでは、看護者が援助プログラムを作成するのではなく、メンバーが日々の活動プログラムを企画し実施している。精神科デイケアでの看護の役割は、メンバーの後方支援的な活

動を行い、メンバー個々の自主性や主体性を促すことである。こういった援助のあり方を学ぶには、学生自身がデイケア活動に主体的に参加し、メンバーとしての体験からその意義を考えることが必要である。また、精神科デイケアでの学習体験を意味づけることで新たな発見をもたらし、さまざまな看護活動のあり方を模索する機会になると思われる。

精神看護学実習に関するこれまでの研究では、精神障害者に対する漠然とした不安や恐れといったマイナスイメージが実習を通して変化した^{1,2)}や、不安を抱えながらも対象とかかわることで信頼関係が形成した³⁾、プロセスレコードを用いることで対象を全人的にとらえることができた⁴⁾、対象とかかわることで自己変容へのきっかけをつかんだ⁵⁾などの学生と患者との対人関係に関するものが多く報告されている。また、学習体験を振り返ることが看護者としての自覚を深めることができる⁶⁾という臨床実習での学習体験を分析することの有用性を示唆した報告もある。

一方、精神科デイケア実習に関する研究では、メンバーに受け入れられることで精神障害者に対する不安が軽減した⁷⁾、精神科デイケアに溶け込むことで精神障害に対

体験をととして学ぶ精神科デイケア実習の意義

する新たな考え方を発見した⁸⁾などの精神障害者へのイメージの変化に関する報告がある。しかし、精神科デイケア実習での学習体験の意義について述べたものは見当たらない。精神科デイケアで学生が実際にどのような体験をしているのか、また体験から何を気づいたのかあるいは何を学んだのかを明らかにした報告はない。

そこで本研究では、精神科デイケア実習で学生がどのような体験をしたのか、またその体験をととして何を感じ、考えたのかを明らかにすることで、精神科デイケア実習の意義について検討する。

II 研究方法

1. 研究対象

N看護短期大学部3年生のうち、2日間の精神科デイケア実習を行なった37名が提出した2日分のレポート(800～1200字程度の自由記載・1日1部)で、研究の資料として活用することの了承が得られた74部を対象とした。

2. 分析方法

精神科デイケア実習のレポートの内容を、精神看護に従事し精神看護学実習指導経験のある3名で抽出しKJ法⁹⁾を用いてカード化し分析した。カード化にあたっては、まず研究者が別々に実習レポートを熟読し、学生がメンバーの一員として体験した場面とその時に感じたことや考えたこと(例えば、場面:メンバーと一緒に料理を行って、事柄:役割をもつことが大切)をそれぞれ1枚のカードに記述し基礎データとした。体験場面のみの記載で感じたことや考えたことが記載されていないもの、また体験場面の記載がなく感じたことや考えたことのみが記載されているものについては、データから除外した。

カードの分析は、まず精神科デイケアで体験した場面であるかどうか、また体験をととして感じたことや考えたことが明確に書かれているかどうかを3回吟味し、カテゴリー化の検討を行なった。次に、すべてのカードを、見たこと、聞いたこと、メンバーとともに起こったことなどの場面をそれぞれに分類し、小カテゴリーとした。小カテゴリー化した場面は、メンバーおよびスタッフとのかかわり、デイケア環境などの視点で分類し、中カテゴリーとした。さらに中カテゴリーをメンバーやスタッフの様子、メンバーの一員として行動する、デイケア環境から影響を受けたことなどを文章化したものを、大カテゴリーとした。

精神科デイケア実習で感じたことや考えたことの分析については、レポートから感じたことや考えたことの内容を抽出し基礎データとした。基礎データをメンバー、スタッフ、自分自身およびデイケアという場などについ

ての感想や意見をまとめ、小カテゴリーとした。さら小カテゴリーをデイケアという治療環境の効果、メンバーとのふれあいで感じたこと、自己のかかわり、スタッフ機能などを事象別にまとめて中カテゴリーとした。中カテゴリーの内容を、簡潔な文章にしたものを大カテゴリーとした。また、カテゴリー化によって抽出された体験場面と聞いたことや考えたことの内容を相互に関連づけて検討した。

III 結果

精神科デイケア実習における学生の体験場面と、その体験場面で聞いたことや考えたことを抽出した結果、合計177枚のカードが抽出された。

1. 精神科デイケア実習における学生の体験場面

精神科デイケア実習での学習体験場面を分類した結果は、表1に示すとおりであった。基礎データは34の小カテゴリーにまとめられた。小カテゴリーから導き出された中カテゴリーは8分類であった。さらに中カテゴリーは3つの大カテゴリーにまとめられた。

最も多かった【メンバーやスタッフの様子を見る・聞く】という体験は、学生が精神科デイケアに参加するなかで様々な場面に遭遇し、その様子を客観的に見たり、聞いたりするという体験である。具体的には、メンバーのレクリエーション活動の様子や精神科デイケアでの過ごし方をそばに見ていたという体験のほか、メンバーから病気や家族のことを打ち明けられた、あるいはメンバー同士の会話の内容を聞いたという体験であった。また、スタッフがメンバーとどのように接しているのかを見た、スタッフから活動の経過や活動内容についての説明を聞いたなど、スタッフとメンバーとのかかわりの場面を見た・聞いたという体験も含まれていた。

2つめの【メンバーの一員として参加する・かかわる】という体験は、学生がメンバーの一員として参加し、メンバーとの間で何らかの直接的なかかわりややりとりがあったという体験である。具体的には、メンバーから声をかけてもらった、メンバーに対して学生が自分から何気なく話しかけたというようなかかわりや、またメンバーと自然に接することのできた、さらにはメンバーと共にゲームやスポーツを行った、コラージュ療法やSST(Social Skills Training)などのデイケア・プログラムを一緒に行ったという体験が含まれていた。

3つめの【デイケア環境に触れる】という体験は、学生がメンバーやスタッフとかかわるといった直接的な体験ではないが、デイケアという場所にいたことやデイケアの雰囲気に触れたことによって感じた体験である。精神科デイケアでいつ体験したのか、またどの場面からそ

う感じたのは明らかではないが、精神科デイケアの印象や雰囲気を感じとった漠然とした記述内容であった。また、デイケア・ルーム全体を見渡して、貼ってある運動会のポスターを見ることによって治療環境に触れるといった記述内容であった。

2. 体験をとおして感じたこと・考えたこと

学習体験場面をとおして感じたことや考えたことは、表2に示すとおり、34の小カテゴリーは分類された。また中カテゴリーは12に分類され、中カテゴリーは6の大カテゴリーにまとめられた。

体験場面をとおして感じたこと・考えたことで最も多かった【**デイケアの意義**】は、精神科デイケアの持つ様々な機能や意義について記述されたものであった。具体的には、精神科デイケアでは似た体験をしたもの同士が互いに理解し合い、仲間同士が支え合っているというセルフヘルプの効果や、精神科デイケアという快適に過ごせる時間や場の必要性についての気づきであった。また、退院後でもデイケアに来ることで人とのかかわり合いを学ぶことができる、生活で困ったことがある場合はメンバーに相談するなど、精神科デイケアを社会復帰のワンステップとして位置づけた内容であった。さらに精神科

表1 デイケア実習での体験場面

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー
メンバーやスタッフの様子を見る・聞く (63%)	メンバーの様子を見て	レクリエーションプログラムでの様子を見て ミーティングの様子を見て メンバーの急な感情の変化を見て メンバー中心の自主的な活動方法を見て メンバーの自由な過ごし方を見て 様々な人がいるのを見て メンバーのある傾向を見て メンバーの役割行動を見て メンバーがスタッフに相談しているのを見て メンバー個人の様子を見て
		メンバーから病気の話聞いて 家での生活や家族のことを聞いて メンバー同士の会話を聞いて デイケアについての話を聞いて
		スタッフの様子を見て スタッフから活動の経過や活動内容の話を聞いて
メンバーの一員として参加する・かかわる (32%)	メンバーと接して	メンバーが声をかけてくれた メンバーが気をつかってくれた メンバーに話しかけた・メンバーと話をした
		メンバーとゲームをして メンバーとスポーツを行って コラージュを行って メンバーと一緒にビデオを見て 絵や作文を書く時間に参加して 運動会とその準備に参加して SSTに参加して
		デイケア・プログラムに参加して
デイケア環境に触れる (5%)	デイケアの雰囲気に触れて	デイケアの雰囲気を感じて デイケアに来て
		運動会のポスターを見て デイケアルームを見て

体験をととして学ぶ精神科デイケア実習の意義

デイケアは小さな社会を体験できる、集団の中で役割を持つことなど、個人だけでなく集団で活動することの意義を感じていた。

【メンバーの理解】とは、メンバー個人のその人らしさの気づきや、メンバーの生活のしづらさなど、障害を持ちながらも地域で生活をしているメンバーを、ひとりの人として理解しようとした記述である。主な内容としては、メンバーは自分たちと同じであったというようなメンバーに対する印象の変化や、優しさを持った人々である、様々な不安や葛藤を持ちながら生きているなど、メンバーのその人らしさや人柄について感じたものであった。また、上手く人と関われないことや感情をコントロー

ルすることが難しい、神経質で過敏な面があるなど、メンバーが抱えている問題や社会生活のしづらさ、家族がメンバーに与える影響の強さ、就労したくてもできないなど、メンバーの悩みや地域で生活することの大変さを感じた内容があった。

【自己の振り返り】は、学生自身が自分のかかわり方や自分の気持ちに目を向けたものである。具体的には、デイケアに参加して楽しかった・過ごしやすかったといった学生自身の感情や自己の価値観に気がついたといったもののほか、人と人のかかわりの中で自分の思いを伝えることの大切さや、逆に話をしなくても何かをとに行うことでその人に近づくことができるなど自分自身の

表2 体験をととして感じたこと・考えたこと

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー
デイケアの意義 (37%)	セルフヘルプの効果	似た体験をしたもの同士は理解し合える 仲間がいると安心できる メンバーが互いに癒し、支え合っている お互いにその人らしさ、自主性を育てている
	デイケアという場の必要性	デイケアという快適に過ごせる時間や場が必要 メンバーが対人関係を学ぶ場になっている デイケアなら退院後でも困ったことを相談できる デイケアは社会復帰へのワンステップとなっている 家から出て通所することの重要性
	集団活動の意義	デイケアでは小さな社会を体験できる デイケアの中で役割を持つことに意義がある
メンバーの理解 (25%)	メンバーのその人らしさ	メンバーは私たちと同じではないか！ メンバーは様々な不安や葛藤を持っている メンバーは優しい
	メンバーが抱えている問題	メンバーは食べるのが早い メンバーは人と上手く関われない 感情をコントロールすることが難しい 神経質で過敏だ 話を上手くまとめられない
	地域で生活することの大変さ	家族がメンバーに与える影響は大きい 就労するのは難しい
自己の振り返り (16%)	自己の感情や価値観の気づき	楽しかった・過ごしやすかった 自分の気持ちや価値観に気がついた
	自己のかかわりの振り返り	普段の会話や思いを伝えることは大切だ 話をしなくても何かを共にすることで近づける
メンバー・スタッフ関係(16%)	スタッフの役割	スタッフの役割を知った スタッフは個別の目的を知った上で働きかけることが必要だ スタッフはメンバーを客観的に見ている
	対等な関係や信頼関係の必要性	スタッフとメンバーは対等であることを実感した メンバーとスタッフに信頼関係がある
治療環境 (3%)	病棟との違い	入院患者とは違う 病棟での関わり方とは違う
その他 (3%)	デイケアへの意見	デイケア環境に改善点があるのではないかと 自主性を持たせすぎているのではないかと

あり方について、メンバーをかかわりの中で気づいていた。

【メンバー・スタッフ関係】は、精神科デイケアにおけるスタッフの役割や、スタッフとメンバーとの関係性に目を向けたものである。デイケアではグループ活動を中心に働きかけを行っているが、単に集団で活動するだけでなくメンバー一人一人の目的を知った上で働きかけることが必要である、スタッフはメンバーを客観的にみている、あるいは、メンバーの視点でプログラムの活動の効果を図るなど、スタッフのかかわり方や役割、またスタッフとメンバーは常に対等であり、信頼関係で結ばれているといった内容であった。

【治療環境】は、入院病棟との違いについて感じたこと内容であった。精神科デイケアのメンバーは入院患者より前向きな姿勢をもち活動的であると捉えている。また、スタッフのかかわりについても、病棟では看護スタッフの主導による援助活動が行われることが多いが、精神科デイケアではメンバーが主体であり、スタッフはメンバーが活動しやすいように支えていたなどの治療環境での違いを感じる内容であった。【その他】には、メンバーの人数に対して場所が狭い、デイケアに来て何もしないメンバーがいる、自主性を持たせすぎではないかなど、デイケア環境の改善点やプログラム活動に対する意見であった。

3. 体験場面と感じたこと・考えたことのつながり

抽出された大カテゴリーについて、体験場面別に感じたこと・考えたことの比率を調べた結果、図1のとおりであった。【メンバーやスタッフの様子を見る・聞く】という体験は、その約半数が【デイケアの意義】に結びついていた。また、【メンバーの一員として参加する・かかわる】という体験は、約1/3が【自己の振り返り】に、さらに約1/3が【メンバーの理解】に結びついていた。

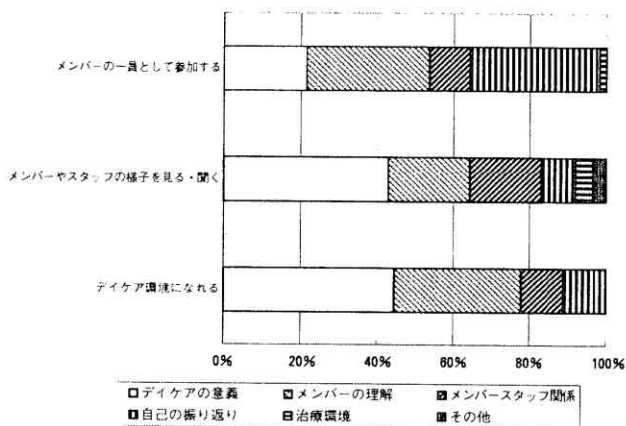


図1 体験場面別に見た感じたこと・考えたこと

た。

体験別に感じたこと・考えたことと中カテゴリーとのつながりをみると、【メンバーやスタッフの様子を見る・聞く】という体験では、全体の2割が【セルフヘルプの効果】に結びつき、次いで【スタッフの役割】に関連していた。一方、【メンバーの一員として参加する・かかわる】という体験は、約2割が【メンバーのその人らしさ】の理解に、また同じく約2割が【自己の感情・価値観の気づき】に結びついていた。

これらのデイケアにおける体験と体験をとおして感じたこと、考えたこととのつながりを関連づけたものが図2である。

IV 考 察

1. 見る、聞くという体験をとおしての学習

精神科デイケア実習で学生は、自分が目にしたメンバーの様子や、メンバー同士のちょっとした会話を自己の体験としてレポートに記述していた。学生は精神科デイケアにメンバーの一員として参加したが、積極的にメンバーとかかわりながら学ぶというよりも、むしろその場にいることで多く事柄を感じたり考えたりという体験をしていた。メンバーとともに行動するだけでなく、メンバーやスタッフの様子を見たり聞いたりすることで、何かを感じたり考えたりするという体験が多かったと思われる。メンバーやスタッフの様子を見る、聞くという体験は、今何が起きているのかを観察することによる学習と考えられる。また、メンバー同士のやりとりやデイケア環境の雰囲気は、見たり聞いたりすると同時に身体で感じるという体験があったと思われる。学生たちはメンバーの一員として行動することにより、さまざまな体験をし、その都度感じたり、考えたりしたことの意味を「ああ、そうなんだ」と実感できたものとする。

スタッフから説明を受けたり、文献から知識を得るこ

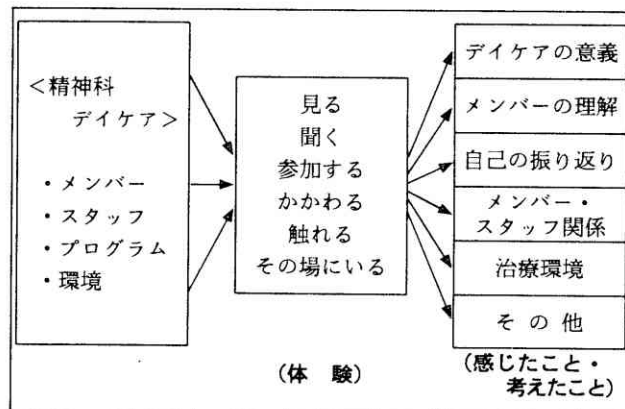


図2 精神科デイケア実習における体験と体験をとおして感じたこと・考えたこと

体験をととして学ぶ精神科デイケア実習の意義

とも重要な学習活動であるが、学生の感性や感覚をつかった学習活動は、新たな知的発見をもたらすといえる。体験から学ぶという活動は、対象への積極的な関心をもつことによって培われるものであり、精神看護に限らずとも看護を実践する上で重要な能力のひとつである。ペプロウは、看護者が学習を進める上での第一段階として五感を用いて観察することの重要性を挙げている。学習活動においては、「能動的・受動的、公然・非公然の如何を問わず、自らが関わっている体験、出来事、状況において何が起きているのかを観察する¹⁰⁾」ことがまずは必要であると述べている。それを育むには、五感もちいて出来事の生じる様子を細部にわたって把握することが必要であり、看護婦の直感を養うような場あたりの観察や傍観者の観察ができることが重要である¹¹⁾と強調している。学生は、精神科デイケアという場にメンバーの一員としてそこにいることで視覚や聴覚などの様々な感覚を活用し、その場のやりとりを場あたりのもしくは傍観者的に観察していたのではないかと思われる。

また、メンバー同士がお互いの病気のことについて語り合っている姿を目の当たりにして「ああ、これがセルフヘルプということなのか！」と感じていた。メンバーやスタッフの様子を見る、聞く、デイケアの雰囲気に触れるといった感覚的な体験学習は、セルフヘルプの効果、精神科デイケアという場の必要性や意義についての気づきをもたらしていったといえる。講義で学習した内容と自分の体験をつなぎあわせることで、「わかった」と納得できたのではないかと思われる。つまり、学生は自分の五感を使って観察した事柄を体験として受け止め、その体験の意味するものを既存の知識を使って、自分なりに理解を深めていったと考える。

2. メンバーと直接かかわる体験をととしての学習

精神科デイケア実習において、学生はメンバーやスタッフの様子を観察するという体験のほかにメンバーに声をかけてもらう、メンバーとともに精神科デイケアの様々なプログラムに直接的に参加するという体験をしていた。

観察という体験が傍観者として五感を使って行なわれるのに対して、直接かかわるという体験は、学生がメンバーの一員として主体的に行動する、メンバーと話し合う、メンバーとともに行動するなど、メンバーとの協同および相互作用から生じる体験である。メンバーの一員として相手を理解するためにかかわろうと努力する学生の姿勢を窺い知ることができる。学生がメンバーに関心を寄せ、積極的にかかわることでメンバーとの間に相互交流が生じたものと考えられる。学生は相互交流という体験から様々な感情を呼び起こされ、学習を深めることができたものと思われる。

また、メンバーの一員としてかかわるという体験は、メンバーのその人らしさをより深く理解することにつながり、自分の気持ちを吟味しつつ対人関係のあり方を振り返る機会になっていたと考える。「看護者として何かをしなくてはと焦っていたら、メンバーが教えてくれた」「緊張していたらメンバーが励ましてくれた」「メンバーの笑顔で気持ちが軽くなった」など、メンバーに助けられるという体験を通して、人と人との自然なかかわりの大切さや人の優しさを感じていった。メンバーとの相互作用から、今まで自分が持っていた固定観念や対人関係における自己の傾向に気づいたり、相手をありのままに理解することの重要性を知る機会になった。また、メンバーは私たちと同じであったととらえたり、メンバーの優しさ、地域で生活していくことの難しさを感じるなど、生活者としての視点でメンバーを捉えるようになっていった。これらは、精神科デイケア実習によって精神障害者へのイメージが変化するといういくつかの先行研究^{7,8)}と一致し、精神科デイケア実習での体験が効果をもたらしたといえる。

3. 精神科デイケア実習において体験をととして学ぶことの意義

精神科デイケアでは、スタッフ主導による直接的な日常生活援助ではなく、メンバーの自主性や主体性を尊重したグループ活動が中心に行なわれている。学生は精神科デイケアを訪れた当初は、何を援助したらいいのか戸惑ったようである。しかし、メンバーの様子を見たり、メンバーに声をかけてもらったり、様々なデイケア・プログラムに参加することで自然にメンバーの中に自然に溶け込んで行くことができた。メンバーとして他のメンバーに受け入れられることで、相互作用やメンバーの一員としての役割を体験することができた。学生はメンバーとしての体験をととして、精神科デイケアの意味やメンバー同士の支え合いの大切さといったものを感覚的に学ぶことができた。学生がメンバーの一員として感じたのは、「ほっとできる」ような安心感ではなかったかと思われる。治療的環境においてもっとも重要なことはそこにいる人々が安心感をもつことである。学生は、メンバーとなる人がはじめて精神科デイケアを訪れたときと同じ体験をしたため、より一層にメンバーの気持ちが理解できたのではないかと思われる。

戸惑いながらもメンバーに徐々に受け入れられていくという学生の体験は、とかく援助者としてこうあらねばならないと思いがちな学生に、メンバーの視点で捉えることの意味を感覚的に意識づけることになったと考える。学生は、援助者である前に「われわれは何よりもまず等しく人間である」¹²⁾ という、看護を行う上で最も重要な

ことをメンバーから教えてもらう機会を得たのである。また、メンバーの一員としてグループ活動に参加することで、病棟での看護婦と患者の関係の中では見られないようなグループ・ダイナミクスやセルフヘルプの活動を目の当たりにし、深く感じることで理解することができたと考える。

精神看護学では、精神障害者を単に精神病患者として受け止めるのではなく、ひとりの人間として理解することを強調している。看護実践においては、看護の対象であるその人をひとりの人間として捉え、その人が抱えている課題をとともに考える姿勢が最も重要である。精神科デイケアは、メンバーがグループの中でその人らしさを十分に発揮でき、援助者もそれを支えていた。学生がメンバーの一員としてその中に入るにより、学生も自分らしく振舞えたのではないかと思われる。メンバーの一員として参加するという体験は、患者を人間として捉えることの意味を理解する貴重な学習の機会であった。

精神科デイケア実習での指導上で重要なことは、学生が見たり聞いたりした客観的な観察体験やメンバーとの直接的なかかわりの体験を、学生自身が言語化できることを助けることである。体験したことを学生自身が解釈し、その意味を他者に伝えることができるようにサポートすることである。体験したことを他者に伝えることは、他者からの反応をもとに自分の感じたこと、考えたこと、行なったことの意味を見つけていけるようにすることである。そのためには、まず教員が学生の感じたことや考えたことに関心をもつことである。学生の感じたことをありのままに受け止め、学生自身が体験したことを自然に振り返ることができるように支援していくことである。教員との自然なかかわりの中で、学生自身が体験を意味づけていけるように導くことが重要である。体験したことを自由にのびのびと語れる学習環境が、看護者としての自己理解や人間としての成長を発展させていくことができると考える。

VI 結 論

精神科デイケア実習において記載されたレポートを分析し、精神科デイケア実習において学生がどのような体験をしたのか、またその体験をとおして何を感じ、考えたのかについて明らかにすることで、体験をとおして学ぶデイケア実習の意義について検討した結果、次の点が明らかになった。

1. 精神科デイケア実習で学生は、メンバーやスタッフの様子を見る、聞くといった観察体験と、メンバーの一員として参加することで、主体的にかかわるという体験学習をしていた。
2. 学生は精神科デイケアのメンバーと共に行動する

という体験をとおして、精神科デイケアの目的や必要性についての理解や、メンバーのその人らしさ、自己の感情や価値観、メンバーとスタッフの関係などについて気づくことができた。

3. メンバーやスタッフの様子を見る、聞くといった体験は精神科デイケアの目的や必要性についての理解のほかに、メンバーの一員としてかかわる体験は学生自身の自己の振り返りや自己成長の機会となっていた。

以上の結果から、精神科デイケアでメンバーの一員として体験をすることで、学生はメンバーから多くの刺激を受け、地域に生活するひとりの人間として、精神障害者をとらえるようになった。また、メンバーを主体とした援助プログラムに参加することで、精神看護のあり方を考える上で重要な学習体験の機会となっていた。精神科デイケアにおける実習指導においては、学生自身が自分の力で体験そのものを言語化し、その意味を吟味し一般化できるよう支えることである。学生がメンバーとのやりとりの中で体験した様々な感情を、まずは指導する側が受け入れることである。精神科デイケア実習での体験の意味するものは、学生自らが看護者としての自己理解や人間としての成長を自ら発展させていけるよう、安心した学習環境を整えることであると考えられる。

最後に、研究にご協力くださった学生の皆さん、ならびに名古屋市立大学看護学部奥村太志先生に深く感謝いたします。なお、この論文は日本看護学会教育学会第11回学術集会で発表したものを一部加筆・修正しました。

引用・参考文献

- 1) 石毛奈緒子, 林直樹: 看護学生の「精神障害者」に対するイメージ, 日本社会精神医学雑誌, 9, 11-21, 2000.
- 2) 水野芳子, 清水光子: 学生は精神障害者をどのようにうけとったか, 埼玉県立衛生短期大学紀要, 3, 13-51, 1978.
- 3) 山田光子, 森千鶴: 精神看護学実習におけるプロセスレコードと指導内容の検討, 精神科看護, 26(10), 50-54, 1999.
- 4) 坂江千寿子: プロセスレコードの学習効果—場面再構成記録の分析と検証—, 精神科看護, 25(7), 43-50, 1998.
- 5) 小林美子, 坂田三允: 実習を通しての学生の学びと気づき, 千葉大学看護学部紀要, 7(3), 67-73, 1985.
- 6) 三原亜矢巳, 多喜田恵子: 学生が困った場面を振り返ることの学習効果—精神看護学実習におけるプロセスレコードの分析より—, 名古屋市立大学看護学部紀要, 1, 63-71, 2001.

体験をととして学ぶ精神科デイケア実習の意義

- 7) 野中絹代, 日高登紀子: 看護学生の不安度の変化からみた精神科デイケアの体験学習の教育効果, 日本看護学教育学会誌, 5(1), 21-29, 1995.
- 8) 北島謙吾: 看護基礎教育における精神科看護, 精神科看護, 33, 90-94, 1992.
- 9) 川喜田二郎: 発想法, 22-30, 中公新書, 東京, 1967.
- 10) O'Toole A., Welt S.R.: Interpersonal Theory in Nursing Practice: Selected Works of Hildegard E. Peplau, Springer Publishing Company, New York, 1989, 池田明子監訳, ペプロウ看護論－看護実践における対人関係理論, 116-125, 医学書院, 東京, 1996.
- 11) Peplau H. E.: Interpersonal Relations in Nursing, G. P. Putnam's Sons, New York, 1952, 稲田八重子他訳, 人間関係の看護論, 288-291, 医学書院, 東京 1973.
- 12) Sullivan H. S.: Conceptions of Modern Psychiatry, W. W. Norton & Company New York, 1953, 中井久夫他訳, 現代精神医学の概念, 19-21、みすず書房, 東京, 1976.
- 13) 精研デイケア研究会編: 改訂精神科デイケア, 岩崎学術出版社, 東京, 1989.

(平成13年10月10日受稿)

(平成13年12月25日受理)

Significance of Learning by Experience in Psychiatric Day Care Nursing Practice

MIHARA Ayami and TAKITA Keiko

Nagoya City University School of Nursing (Mental Health Nursing)

Abstract

A two-day training course in psychiatric day care, in addition to psychiatric nursing practice on the ward, was applied to students to strengthen understanding of rehabilitation nursing. In the present investigation, we attempted to clarify the usefulness of practical hands-on experience in practice for psychiatric day care by analyzing their term papers after the end of the practice program.

The results were as follows: 1. Students who underwent the psychiatric day care practice had firsthand opportunities to hear from patients and staffs, and to acquire hands-on training as one of the members. 2. Through be having together with faculty members, students understood the objectives and necessity of the psychiatric day care, and also learned a better relationship between faculty members and staffs.

This program may afford to students many important experiences that they recognize and respect human individuality and understand the life of a person with psychiatric problems in the community.

Key words: psychiatric nursing practicum, psychiatric day care, learning by experience